ご挨拶

学長　大西　晴樹

明治学院大学はキリスト教による人格教育を建学の精神とし、その教育理念を一言で表現するならば“Do for Others”「他者への貢献」と言い表しています。これは、新約聖書の言葉であると同時に、明治学院の創始者 J.C. ヘボン博士の生涯を貫く理想を表現したものです。

ヘボン博士は、幕末維新の日本へプロテスタント・キリスト教を伝えるべく 150 年前に来日したアメリカ人宣教医師です。医師としてニューヨークで成功を収めながらも、開国したばかりの横浜に上陸しました。当時の日本は尊皇攘夷の嵐が吹き荒れ、まだキリシタン禁令の高札が掲げられていた時代です。身辺にはスパイが潜入し、クララ夫人は何者かに殴打され心身ともに傷を負ったことさえありました。それでも博士は聖書の言葉に堅く立って、無償で弱者への施療活動をなし、患者との出会いを通して日本語を学び、夫人とともに青少年に英語を教えるべく明治学院の前身であるヘボン塾を開設し、日本最初の本格的和英・英和辞典である『和英語林集成』を編集・出版、ついに聖書を日本語へ翻訳したのでした。

明治学院大学の教育活動で、“Do for Others”という教育理念を直接体現するのがボランティア活動だといえましょう。1990 年代前半の明治学院大学においてボランティアは、いく人かの教員によるリレー方式の総合講座として、現場ではなく、教室で教えられていました。しかし、1995 年の阪神・淡路大震災を契機として、ボランティア活動の重要さが認識され、ボランティア活動を正課であれ、課外であれ、明治学院大学において推進することに学内のコンセンサスが与えられました。じっさい明治学院大学は、震災後、明治学院ゆかりの神戸の賀川記念館を拠点として延べ数百名の学生を現地に派遣し、おもに子どもや老人のケアに献身的に当たり、神戸の復興に間接的ながら貢献し、参加した学生に多くの感動を与えました。その後 1998 年に横浜キャンパスに全国の大学に先駆けてボランティアセンターを開設し、2001 年には、白金キャンパスにも開設しました。また全国の大学におけるボランティア活動を支援するソニー・マーケティング学生ボランティアファンドの事務局として中心的な役割を果たし、2003 年には優れた教育活動に対して競争資金が与えられる文部科学省の第一回目の特色 GP（good practice）に選ばれました。

さて、2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災、その後の福島原子力発電所の事故は、大津波と放射線汚染によって多くの避難者を生み出し、死者・行方不明者は約２万人を数えるという大惨事になりました。ボランティアセンターは学内外の支援のもと、４月よりユニセフ、東北学院大学、岩手県立大学を拠点に「Do for Smile@ 東日本」というプロジェクトを開始しました。ユニセフ経由では

震災直後の学校再建を支援し、東北学院大学経由では夏期休暇を利用して宮城県気仙沼市に延べ50名の学生を派遣し、岩手県立大学経由では岩手県大槌町吉里吉里地区に継続的にボランティアを派遣しています。とりわけ、大槌町での活動は地元からも高く評価され、今後も大学と地域を結ぶ目的で、明治学院大学と大槌町の間で相互協定を締結する予定になっています。またかろうじて被災を免れた『吉里吉里語辞典』再生のために、辞典のデジタル化のためのボランティアを学内外から募り、被災地に行かなくともできるボランティアとして、この企画には多くの方が参加しました。

今年度のボランティアセンターはまた、新入生を対象に京浜地区のNPO,企業等の受入先に一斉に派遣する“1 Day for Others”を5月に実施予定でしたが、震災のために延期となるも、10月に250名近くの学生が参加して行われました。今後は、明治学院大学の特色を象徴する行事として発展させていってほしいものです。

現在、ボランティアセンターは、白金と横浜のボランティアセンターを拠点にいくつかのプロジェクトを立ち上げ、コーディネーター、学生スタッフを中心に日常的な活動も推進しています。また、ボランティア情報を紹介するためにメールマガジン「MG ☆ボラマガ」を配信しており、その登録者は2012年1月現在で283名（学生235名、教職員が48名）を数えます。

明学生の自発的なボランティア活動をさらに支援するため、「ボランティアファンド学生チャレンジ賞」を実施しています。大学グッズの売り上げの一割が大学からボランティアセンターに委託され、この賞の原資となっています。応募団体によるプレゼンテーションを中心とした審査会には、私も審査委員として参加しますが、熱のこもった発表を聞くことができます。

ボランティアセンターでは、海外でのボランティア活動にも力を入れています。毎年カリフォルニアに派遣するアメリカNPO ボランティア体験学習プログラムはテーマを定め、地元のNPO 活動の一翼を担い、日本のわれわれが置かれている問題との共通性を考えようとしています。

学長としてみなさんにお伝えしたいのは、“Do for Others”という教育理念は「言うは易し、行うは難し」です。ボランティア活動は、相手に感謝されてはじめて意味をもつのであり、そうでなければ、一人善がりのお節介か、たんなる自己満足にすぎません。ボランティア活動を通じて、自分たちの“Do for Others”の気持ちが、どれほど地域や近隣の人々に感謝されるのか考えてみるのは、他者を理解するうえで大切なことであり、もし感謝されていなければ、どうしたら感謝されるのか、試行錯誤することは、人間の成長にとって大切なことです。

明治学院大学の教育理念を体現するボランティア活動に、ボランティアセンターを通じて参加することによって、学生の皆さんがお金では買えない大切なものを手に入れることを切に願っています。

センター長挨拶

ボランティアセンター長　原田勝広

ボランティア精神は世界各地の利他主義と関係があります。ギリシャ語のアガペー、ラテン語のカリタス、ヴォルンタス、イスラム教のザカート、サダカ。さらに仏教には、貧しいひとへの施しを意味する喜捨という言葉がありますし、儒教には、自己抑制と他者への思いやりを意味する仁という言葉があります。これらに源を発する利他主義をまとめてボランティア精神と呼んでよいと思います。日本でも、奈良時代から行基、空海といった僧侶を通して、慈善活動、奉仕活動という名のボランティア活動が行われてきました。江戸時代には武士に対抗して力をつけた商人が大阪で、彼らの名前を冠した淀屋橋や道頓堀を作りました。欧米から日本にボランティアという言葉が入ってきたのは第二次世界大戦後のことですが、活動自体は日本に古くから存在したのです。

明治学院大学は、無償で弱者への施療活動を行ったクリスチャンのヘボン博士の “Do for Others” を教育理念としています。1995 年の阪神・淡路大震災で現地に多くの学生が駆け付けたのを機に、学内にボランティアセンターを設置しました。これまでの活動は多岐にわたり、充実したものといえますが、特に、キャンパスに近い白金、戸塚という大学周辺の地域コミュニティとの関係を構築するなかでの、ボランティア活動は、周辺住民の方々からも高く評価されているものです。

日本のボランティア活動は、この阪神・淡路大震災を契機に大変活発になりました。1998 年にはＮＰＯ法が施行され、アマチュアリズムの任意団体がＮＰＯ法人として組織化され、教育、福祉、街づくりなどの分野で、市民活動を担うようになっています。もちろん、市民活動のベースになっているのはボランティア精神であることは当然です。70 年代に住民運動として、反政府、反企業の姿勢を強くしていた市民活動は、現在では、その対抗姿勢を転換し、政府、企業とパートナーシップを組んで協働する創造型に変わってきています。それを個人のベースで見てみると、他者のために尽くすというよりは、自己実現のための新しい生き方としてボランティアをとらえている人が多い傾向にあります。

こうした中で起きたのが、ことし３月 11 日の東日本大震災とそれによって引き起こされた津波でした。明治学院大学では、被災者が一日でも早く笑顔を取り戻してくれるようにと、ただちに「Do for Smile@ 東日本」プロジェクトを立ち上げ、これまでに延べ 1000 人近い学生がボランティアに参加しました。

この震災を通して、私たちは、もう一度、利他主義としてボランティアというものの原点を見つめなおすことができました。また、同時に、阪神・淡路大震災の時と比べ、他の多くのセクターが支援活動に参加している実態を知ることができました。つまり、自衛隊から始まり、国連機関、行政、企業、普段は海外で人道支援活動をしている国際協力ＮＧＯ、地元のＮＰＯ団体が活動をしていました。

「Do for Smile@ 東日本」プロジェクトについて述べたいと思います。実は、震災後、他大学に先駆け被災地にいち早く駆け付けたのは明治学院大学でした。こうした時こそ、先頭に立つのがボランティアセンターに課された役割です。そして、緊急時こそ、支援のスピードが問われます。ボラセンでは現地の非営利組織（ＮＰＯ）や大学から情報を集め、震災後、直ちに「Do for Smile@ 東日本」というプロジェクトを立ち上げました。教育理念である “Do for Others” に由来するのはもちろんです。

余震など緊急事態に備え退避基準を作成して学生の安全確保のための措置を取りながらも、募金をもとに、4 月 4 日には日本ユニセフ協会と協働で子どものケアを始めました。他大学との協力も進み、合計で以下の３つのプログラムが動きだしました。

（1）明学・日本ユニセフ協会協働プログラム

（2）明学・岩手県立大学協働プログラム

（3）明学・東北学院大学協働プログラム

「早く」始めることができた支援活動ですが、その後、重点目標は「継続」に移りました。３年後、５年後もボランティア活動は続いているはずです。また、プログラムも広がり、日本赤十字、生協、日本財団学生ボランティアセンターと連携したプログラムも動いています。

学生は本当に真摯に取り組んでくれました。大学では、“Do for Others” という明学の教育理念を身をもって体現してくれた彼らを讃えるため、参加者全員を “ ボランティア大使 ” として認定することを決めました。これを契機に、今後、学内でも、また卒業してもこの明学の理念を広め、実践してほしい。そして、よりよい社会、よりよい世界のために活躍してほしい。そう期待しています。

明治学院大学では様々な試みに挑戦しています。ひとつ新しいプロジェクトを紹介しましょう。

新入生を対象にした「1 Day for Others―まちへ出よう」がそれです。2011 年度スタートです。新１年生が一斉に、大学の外へ “ 同時多発 ” 的に繰り出すのです。「ボランティアコース」「社会起業家コース」「企業の社会貢献・ＣＳＲ体験コース」の３つのコースがあります。連れて行くのは１年次上の新２年生のリーダー学生です。希望によって、ボランティアを体験するもよし、ビジネス手法で社会貢献に挑戦している最近注目の社会起業家のところで１日インターンを経験するのもよし、誰もが知っている大企業で、利益を追い求めるだけではなく、社会に貢献しようとしている業務の研修をするもよし、というわけです。

たった１日の活動ですが、これをきっかけにして、何のために、何を勉強するのか。そして、自分はどういう学生生活を送りたいのか、どんな人生を送りたいのか。改めて、じっくり考えてほしいのです。そのことを通して、これからの学業、サークル活動、ボランティア活動につなげてもらいたいと思います。

何か新たな価値が生まれるとしたら、それこそが、本来のボランティアも持つ意味であり、大学におけるボランティアセンターの役割だと、私は考えています。そして、そのために、全力を尽くしたいと思います。